

安然と三昧耶戒

——七衆を中心に——

寺 本 亮 晋

はじめに

台密において、安然是最も三昧耶戒について言及した学匠である。円仁や円珍は三昧耶戒儀といった事相に言及するも、教相に触れてはいない。⁽¹⁾ 安然の時代に至り、密教經典の将来など条件が整ったことによって、密教の戒である三昧耶戒を整備することができたのであろう。

「三昧耶戒」は『蕤咽耶經』等の密教經典に出てくる語であり、『大日經』においては具緣品の偈文が知られ、他に三世無障礙智戒や耳語の一偈などの別称が存在している。さらに『大日經義釈』によって二種の四重禁解釈がなされたのである。当初は三昧耶戒という総称の中に、種々の別称が存在したに過ぎないのだが、安然是これらに対して教学的意義を持たせた。過去の研究では、台密の戒相について論じられたものは少なく、現行の三昧耶戒儀に反映されていないとみてよい。⁽²⁾ そこで、台密の大成者とされる安然が一体どのような

三昧耶戒を理解していたのかを研究するために、小稿では戒相を明かす中の七衆を中心に論じてみることにする。

一 七衆供受について

安然是、三昧耶戒の戒相について、『觀中院撰定事業灌頂具足支分（具足灌頂）』卷三に詳細に記している。

然則大悲胎藏入曼荼羅之前有七種戒。一者受方便学処。五戒十善法戒。二者三世無障礙智。三平等戒。三者真言門行菩薩根本四重禁戒。四者真言門行菩薩十重禁戒。⁽³⁾ 五者入三昧耶耳語一偈戒。六者四波羅夷三昧耶戒。七者持明禁戒。

七日作壇法の六日にあたり、三昧耶戒の授受について解説したこの箇所では、『義釈』に依れば、曼荼羅に入る前に七種の戒があるといい、それぞれ①受方便学処・五戒十善法の戒、②三世無障礙智・三平等戒、③真言門行の菩薩の根本四重禁戒、④真言門行の菩薩の十重禁戒、⑤入三昧耶の耳語一偈の戒、⑥四波羅夷の三昧耶戒、⑦持明禁戒を挙げている。元々

『大日經』の偈文であつた四重禁が三昧耶戒の戒相と考えられていたが、戒を受ける従来の七衆に対して、安然是三昧耶戒の別称を七種類に開いたのである。ここで注目すべきは、この七種の戒はいずれも『大日經』や『義釈』に説かれる戒だという点である。

この七種の三昧耶戒を、安然是七衆に対してどのように配当したのであるか。続く『具支灌頂』卷三には、受戒に於いて七衆別受の法と七衆供受の法とがあり、供受の法であれば『梵網經』の十重四十八輕戒を受けるといのである。

然於受戒、有七衆別受法、有七衆共受法。若別受法、比丘比丘尼出家菩薩別受四重及二十四戒一百四戒。優婆塞優婆夷在家菩薩別受六重及二十八戒。沙弥沙弥尼出家菩薩別受十善。式叉摩尼別受二法。若共受法、七衆同時共受十重四十八輕戒。

この『梵網經』は『金剛頂經』という密教經典の流れを引き、さらに浅略であることを安然是主張する。これは『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』卷上の「此地梵網經兩卷從此經中出浅略之行相也。」⁽⁵⁾を証文とし、『普通授菩薩戒広釈(普通広釈)』卷上に梵網戒とは別に菩薩大藏經戒があり、一切如来三昧耶戒といっている。

若依真言訣云、此梵網戒出金剛頂浅略之門。別有菩薩大藏經戒。名為一切如来三摩耶戒。具有四波羅夷・十重禁戒・四大力罪・十方便処。如昔釈迦菩薩、六年苦行坐道場時、正覺不現。

安然と三昧耶戒(寺本)

一切如来皆來、授此三摩耶戒、五相成仏、則令成世尊。從此直道頓入仏界。故龍樹云、惟真言法中、即身成仏故、是說三摩地法。於諸教中、闕而不書。故今此顯教中且置此事云云。

如来が三昧耶戒を授ければ、五相成仏して頓に仏界に入ることとを、『菩提心論』の即身成仏を引いて説明しているのである。密教的解釈を避けて円戒を論じる『普通広釈』ではあるが、ここでは顯教における梵網戒と七衆が同時に受ける三昧耶戒の戒相としての梵網戒との立場を明確に区別しているのである。

また、同じ『普通広釈』卷上に、七衆供受を三に分け、七衆はみな如来であることを正義とし、この如来金剛宝戒を受け終わればみな仏と名づくという。

七衆共受、別有三名。一云、隨受者衆。各成一衆。故本業云、受二分戒、名一分菩薩。乃至受具分戒、名具足菩薩。二云、七衆皆名菩薩僧。故涅槃云、僧名和合。和合有二。一者世和合。名声聞僧。二者第一義和合。名菩薩僧。淨行在家菩薩、皆名大優婆塞僧。出家菩薩、名比丘僧。三云、七衆皆名如来。故梵網云、受菩薩戒。即入諸仏位。雖有三義、第三正義、此是如来金剛宝戒。受此戒、竟皆名仏。

ここも前述の如く、円戒の戒体である金剛宝戒と対照的に如来の金剛宝戒とすることとで、『梵網經』の十重四十八輕戒を密教的に解釈し、従来の梵網戒と区別したのである。

このように、安然が立てた七衆供受の戒法は、戒も人も供

安然と三昧耶戒(寺 本)

であるという立場から『梵網經』の十重四十八輕戒を戒相としており、最澄以来の円戒を踏襲しつつも密教的解釈を与えているのである。

二 七衆別受について

次に、安然が三昧耶戒を七種に開いて七衆別受とした理由をみていきたい。『具支灌頂』卷三には、三昧耶戒を受ける七衆をそれぞれ説いている。

今真言門六種戒中、第一方便学処五戒十善如菩薩優婆塞・優婆夷六重、沙弥・沙弥尼十善戒也。第二三世無障礙智三平等戒如式叉式叉摩尼二種学法也。第三根本四重・第六菩薩四重如出家菩薩四重禁也。第四菩薩十重如七衆共受十重也。第五耳語一偈如菩薩比丘・比丘尼六念五觀法也。第七持明禁戒非如七衆受戒。此是修証際限之戒。例如一方等陀羅尼隨樂律持云云。

前述の七衆の番号に照らせば、①真言門を行ずる菩薩の優婆塞・優婆夷の六重禁、沙弥・沙弥尼の十善戒、②式叉・式叉摩尼の二種の学法、③・⑥出家の菩薩の四重禁、④七衆供受の十重禁、⑤菩薩の比丘・比丘尼の六念五觀法、⑦七衆の受戒ではなく、修証際限の戒という六種に配当している。

安然は、この七衆別受の三昧耶戒が次第に則って受戒していくことを明かしている。

然受真言門中戒法入曼荼羅皆名真言門行菩薩。設有善男・善女但受結緣灌頂。初受方便学処五戒・十善名為真言門行

菩薩優婆塞・優婆夷・沙弥・沙弥尼。次受三世無障礙智戒法名為真言門行菩薩式叉・式叉摩尼。次受四根本戒名為真言門行菩薩比丘・比丘尼。次受耳語一偈、是同僧祇六念・有部五時之法、以驗曾受具戒以不。次受三昧耶四根本重。是同已受具竟更說戒体云云。其十重法七衆共受、亦隨三人衆各各一衆云云。若是本成頭略七衆、今受真言門中諸戒名為廻心真言七衆云云。

初めに①方便学処の五戒・十善戒を受け、次に②三世無障礙智戒法を受け、次に③四根本戒、⑤耳語の一偈、⑥三昧耶の四根本重禁と次第を取るというのである。④の七衆供受の十重が外れていることや、⑦持明禁戒の説明もなされていないことなど、幾つかの疑問は残るものの、やはり安然は次第を取るために七衆に対して三昧耶戒を開いたとみていいだろう。

そこで、三昧耶戒として次第を取るのであれば、第七の持明禁戒は最も重要と考えるのが定石である。しかし、持明禁戒は六ヶ月間真言を持誦するという時間的条件のあることを安然は認識している。一般的に、三昧耶戒を授かってから灌頂に進んで真言門に入る過程を踏むのであり、三昧耶戒は真言を持誦するという行以前に授からなければならない。七衆という機根に即した戒と異なる性質の持明禁戒を、安然が次第の最後の第七に置いたのは、『大日經』や『大日經義釈』に説かれている点を重視した結果ではないだろうか。

ところで、安然は『教時問答』卷二で、曼荼羅の仏・菩薩

の持する戒を配当している。

故真言宗四重曼荼羅尊一一皆有所持之戒。中台院・第一重持四根本・祕密十重。第二重持菩薩十重四十八輕戒・菩薩四重・六重・二十八輕戒。第三重持三乘二百五十戒・尼五百戒及以人天五戒・十善。但入真言門者、初受三世無障礙戒及三摩耶戒。然後遍持自行化他一切戒品、以為與顯教別。

ここは基本的に七衆別受の戒法と隔たりはなく、第三重から中台へ従因向果の次第をとると考える。しかし、真言門に入る者は、初めに三世無障礙智戒及び三昧耶戒を受け、然る後に遍く一切の戒を持すること、それが顕教と異なる点だと強調するのである。ここでいう三世無障礙智戒や三昧耶戒は、式叉摩尼のための別受の戒とは考えられないため、総称としての三昧耶戒と捉えるべきであろう。

また、『教時問答』巻二では、曼荼羅に二種ありとして従本垂迹と修因向果を挙げる。

答。凡真言宗曼荼羅義略有二種。一者従本垂迹曼荼羅。是一切諸仏内証外化之三密也。釈迦一代亦撰此中。諸宗就此釈三種身。二者修因向果曼荼羅。是一切行人從凡入聖之三密也。釈迦所化亦撰此中。諸宗就此釈三種種行。(中略)今真言中初心広見法界諸尊、従本垂迹・修因向果曼荼羅壇下以所入而為究竟。是故初入第三重、次入第二重、次入第一重、終入中台。

第三重から真言門に入り、次第を経て中台に向かう修因向果を三昧耶と戒の七衆別受に相当し、従本垂迹を七衆供受と捉

安然と三昧耶戒(寺本)

えるのである。

結び

安然では三昧耶戒を通と別に分け、七衆に相当するよう整備した。これは安然が用いる絶待判や相待判に通ずる解釈の方法でもある。七衆通受では、円戒との区別を図った上で金剛頂経の浅略といわれる梵網戒を用いている。また、七衆別受では、曼荼羅の従因向果を基に中台へ向かうように次第を経ている。それは七衆の機根に則ったものではあるが、『大日経』などに説かれる戒を尊重し、持明禁戒をも三昧耶戒に含めるという安然独自の会通がみられた。

- 1 拙稿「台密の三昧耶戒の戒相とその概観」(『天台学报』五三号掲載予定) 参照。
- 2 安然の密戒について、浅井円道『上古日本天台本門思想史』(一九七三、平楽寺書店) 八〇三、八一〇頁に詳しく詳しいのみである。
- 3 大正七五・二三五頁上。
- 4 大正七五・二三五頁中。
- 5 大正三九・八〇八頁上。
- 6 大正七四・七六四頁中。
- 7 大正七四・七五八頁中。
- 8 大正七五・二三三頁下。
- 9 大正七五・二三三頁下。
- 10 大正七五・四〇〇頁上。
- 11 大正七五・三九八頁中。

〈キーワード〉 安然、三昧耶戒、『具支灌頂』、七衆

(大正大学総合佛教研究所研究員)